

令和4年度第3回対馬市海岸漂着物対策推進協議会 議事録
(令和4年度対馬市海岸漂着物対策事業中間支援業務)

1. 会議日時：2023年（令和5年）2月1日（水）14：30～17：00
2. 会議場所：対馬市交流センター4階視聴覚室
3. 出席者：

委員	糸山委員長、中山委員、小島委員、川口委員、犬束委員、大庭委員、本田委員、森委員、山下委員、舍利倉委員（順不同）
事務局	【対馬市市民生活部環境政策課】 阿比留正臣課長
運営	【一般社団法人対馬CAPP（以下、CAPPと略す）】 上野芳喜、末永通尚、吉野志帆、原田昭彦、俵理奈、古藤利誉 山内輝幸、佐々木達也

（欠席：清野委員、二宮委員、島谷委員、吉原委員、平川委員）

1. 議事録

注：

- ・ 「えー、あの、えっと」などの文脈において意味をなさない単語、および、言い直した発言については記載していない。明らかな間違いのある発言や口語表現については、適宜修正している。
- ・ 発言者は赤文字で示し、発言の補足は（かっこ書き）にて示している。
- ・ 質問時の委員の挙手動作およびそれに伴う委員長の指名発言は、議事録修正時に削除している。
- ・ 発言の趣旨が変わらない程度に、適宜語順を入れ替えている。

運営(末永)：皆さますみません。時間が少し過ぎてしまいましたが、令和4年度第3回対馬市海岸漂着物対策推進協議会を開催いたします。まず、環境政策課の阿比留課長よりご挨拶を申し上げます。

事務局(阿比留)：こんにちは。環境政策課の阿比留です。本日はお忙しい中、長崎大学名誉教授糸山委員長様を始め、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。対馬市では、去る9月20日に大阪のサラヤ株式会社、株式会社関西再資源ネットワーク、NPO法人ゼリ・ジャパン、関西経済同友会と連携協定を締結し、海岸漂着ごみを始めとするプラスチックごみなどの循環経済モデル「対馬モデル」の研究開発に取り組んでいるところでございます。この対馬モデルを、来たる2025年の大阪関西万博のパビリオンで展示していただき、世界に対馬の状況と取り組みを発信していただける予定となっております。連携協定事業者が非常に熱心に取り組んでいただいております、その成果が大いに期待されるところでござい

ます。さて、本日の協議会は、前回の振返り部分をなるべく早く終わらせていただきまして、本日の新たな協議項目に時間を割いて協議をお願いしたいと存じます。それでは皆様の忌憚のないご意見をいただきたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。以上でございます。

運営(末永)：続きまして、糸山委員長ご挨拶をお願いいたします。

糸山委員長：どうもこんにちは。ここに来て、最初に目に入りましたのがこれ(新聞記事)なんですけど、その前に、これはその時の長崎新聞です。これを見た時によかったなと正直言って思いました。対馬 CAPP が長崎新聞の一面を飾ったのだと思ひまして、この記事の中で何が良かったのかというと、糸山の評価としては、対馬市という行政と民間団体である対馬 CAPP が協働でこの海岸漂着ごみを考えていこうという組織を作り上げたということが僕にはとっても素晴らしいことだと思います。多分、そういう民間団体と行政が一緒になってこういうことをやっていこうとしているところは全国的にはないのではないかなという気がします。民間団体が行政に協力しているところはあります。ここではお互いが、これは自分が、これはそちらがというように分けながら、きちんと漂着ごみのことに関して仕事を分担しながら少しずつ歩を進めているというところが一番素晴らしいのかなと思っています。そういう対馬市役所と CAPP のそういう歩みに我々も便乗しながら、この協議会の中で海岸漂着ごみの問題をみんなで協議しながら新しい課題についても少しずつ考えていけたらいいのかなという気がしています。ぜひ今日は皆さん方の忌憚のないご意見をお聞かせいただきたいと思っております。今回もよろしくお願いいたします。

運営(末永)：続きまして議事を進めたいと思います。資料に議事次第というページが一番初めにあると思うのですが、議事(3)日韓市民ビーチクリーンアップオンラインワークショップの報告が終了した後に 10 分間の休憩を取りたいと思います。記載がございませんでご迷惑をおかけしますがよろしくお願い申し上げます。委員長、議事の進行をお願いいたします。

糸山委員長：はい。それでは議事を進めます。まず議事(1)、令和 4 年度第 2 回協議会の振返りです。よろしくお願いいたします。

運営(末永)：令和 4 年度第 2 回協議会の振返りについてご報告させていただきます。5 ページをご覧ください。今回話がございました通り振返りにつきましては端的に短く報告をさせていただきます。まず、第 1 回の協議会の振返りということで、この時に関しましては海岸に漂着した流木の扱いの問題というのが議論されました。実際こちらを回収することにつきましては、法的に難しいというところがございしますので、海岸清掃につきましては基本的に流木は拾わずにプラスチックなどの海に残り続けるものを優先して拾うという

ことで結論に達しました。議事(2)について 11 ページをご覧ください。対馬海ごみ情報センターが発信する情報の確認ということで、ここにつきましては子ども達は非常に環境意識の高い教育がされていて環境に対して非常に興味があるのですが、大人の方が対馬はむしろ不法投棄であったりポイ捨てをする方が多いということで、今対馬市から新たに話をいただいております、こうした大人の方に普及啓発をする為の番組を制作中でございます。こちらは対馬市 CATV で放送予定で今現在制作中でございます。次、14 ページをご覧ください。ステークホルダーとの連携についてということで、私共が今現在色んなところと関係性を構築しているところなんです、対馬グリーンブルーツーリズム協会と提携して修学旅行の受入れというのを本格的に行なっております。その部分について今後もさらに連携を深めていくということと、さらに学生の修学旅行だけではなく、最近問い合わせのあります企業の研修などについて大人向けのプログラムを準備して充実を図っていきたいということでお話をさせていただきました。簡単ではございますけれども、前回の振り返りについて終わらせていただきたいと思います。

糸山委員長：どうもありがとうございます。何かご質問等ございませんか？ではその次、議事(2)対馬市の普及啓発活動の取組みについてでございます。

運営(吉野)：資料 2 につきましては対馬 CAPPA の吉野がご説明させていただきます。対馬市の普及啓発活動の取組みということで、こちらでは主に私達が取組みました業務の件数をご報告させていただきます。委託されておりますトランク・ミュージアム®対馬版につきまして、目標件数 20 件でしたところ、23 件のご依頼がありまして、以下に内訳を記載しております。小学校 3 件仁田小学校、金田小学校、大船越小学校、企業が UBE(株)、パタゴニア社日本支社、(有)対馬ビルサービス、(株)セブン銀行、(一社)対馬里山繁栄塾、大学 3 件、長崎大学ながさき海援隊、九州国際大学、長崎大学環境科学部、メディア 3 件、NCC が 2 回、NHK、展示 3 件、対馬空港、対馬博物館、日韓市民ビーチクリーンアップオンラインワークショップ、中学校 2 件、鶏知中学校、大船越中学校、高校 3 件、対馬高等学校、虹の原特別支援学校、追手門学院高等学校、団体に対して 1 件、化学総連に対しトランク・ミュージアム®対馬版を行なっております。次のページになりますけれども、ボランティア海岸清掃につきまして、目標を 10 件としていましたところ、お断りした団体様もあるんですが、それでも 30 件ございます。企業が 10 件、九州電力豊玉発電所、九州電力送配電(株)2 回、(一社)対馬観光物産協会、UBE(株)、(有)対馬ビルサービス 2 回、デンカ(株)、NTT 西日本(株)、対馬海上保安部、大学が 4 件、長崎大学ながさき海援隊、九州国際大学、学生ボランティア団体 IVUSA2 回、高校が 4 件、対馬高等学校 2 回、追手門学院高等学校、虹の原特別支援学校、中学校 4 件、久田中学校、大船越中学校、西部中学校、鶏知中学校、小学校が 1 件、精道三河台小学校、黒い【】で記しております巖原小学校と金田小学校は海上保安部と合同で開催しており、海上保安部の中で組み込んでおりますので、数としてはカウ

トしておりません。団体としてが7件、壱岐のボランティア団体が2回、同じ団体様が2回来ていただきました。化学総連が2回、対馬市環境整備協働組合、こちらも(有)対馬ビルサービス様と合同で行なっておりますので、7件の中には入っておりません。ボランティア団体エム・フィッシャー、対馬ロータリークラブが2回、対馬市民ボランティア有志、ボランティアグループSEAということで、30件清掃をさせていただいております。海ごみ関係イベントということでその下に記載をさせていただいておりますが、主に2022年11月以降に参加、または実施したものを記載をしております。こちらの文章は、九州探検隊のブログより一部抜粋とありますが、九州探検隊というのは、大丸さんの中で結成されております企画部隊のこととございまして、記事はご覧いただければと思います。こちらの大丸さんに私達が参りました経緯と申しますか、11月12日にXmasツリーの点灯式にお声がけいただきましたのは、昨年度のXmasツリーの装飾やオーナメントには全て対馬の海ごみを使用されております。そこで海ごみということでトランク・ミュージアム®対馬版の展示をしていただけないかということをお声をかけていただきましてトランクを持って参りました。末永理事がこちらで登壇をいたしまして、福岡の大学で対馬に関係のある対馬出身の女性、あるいは海ごみについて勉強している学生さん達と登壇をしてディスカッションを行っております。資料にあります通り、ツリーは対馬に自生するヒトツバタゴ、別名ウミテラシともいいまして、このウミテラシをイメージしたツリーが装飾されております。透明な丸いオーナメントの中に白いものは、対馬で回収された発泡スチロールが詰め込まれております。また写真にはございませんがツリーの周りには、九州産業大学造形短期大学の皆さんがデザイン、製作されました対馬のプラスチックを使ったサンドアートの展示なども行なわれておりまして、多くの島外の方が対馬の海ごみについて触れる良い機会だったのではないかと思います。そういったところにトランク・ミュージアム®対馬版を展示させていただきました。次のページをめくっていただきますと、12月3日に日韓市民ビーチクリーンアップオンラインワークショップ行ないました。前回の協議会が11月29日に行なわれまして、その数日後にオンラインワークショップを行ないますということをご報告をさせていただいたんですけども、予定通りこちら今ご出席されております(一社)JEANの小島様にご登壇いただきまして、対馬の海ごみの現状、それから小島様につきましては、海ごみについての基本的な知識と申しますか、高校生と釜山の外国語大学の皆さんに対し、レクチャー、ディスカッションを行なったというイベントと申します。日本経済新聞の方にも掲載をさせていただいております。それから12月13日から15日にかけて、十八親和銀行大村支店の方にCAPPから2名参りまして、トランク・ミュージアム®対馬版の展示を行なっております。来客に対し、海ごみに関して興味のある方がいらっしゃったらお声をかけいたしましてトランク・ミュージアム®対馬版のご紹介、対馬の海ごみについてどのような状況かということをご説明させていただいております。こちら新聞に掲載していただきまして株式会社日本金融通信社の12月の記事に載っております。そして次のページなんですけど、つい先日1月14日から20日にかけて対馬博物館でトランク・ミュージアム®対馬

版の展示を行ないました。トランク・ミュージアム®対馬版を展示していただきたいということで博物館の方からご依頼をいただいたんですが、博物館の展示ブースに向かいましてスペースが広くてトランクを展示するだけではもったいないということで、海ごみに関する業務の写真、現状、そして中部中継所でどのような処理を行なっているのか、どのような形で対馬の海ごみ生まれ変わったプラスチック製品が誕生しているのかなど現物を使って体感、見ていただきたいということで展示いたしました。実質 4 日間ほどの展示期間になったんですが、約 100 名の方にご来場いただきまして、SNS を見てきましたという方もいらっしゃるれば新聞を見てきましたという方もいらっしゃる、たくさんのご来場があり、非常にありがたかったです。隣に掲載されております SNS 等による普及啓発ということで、こちらは第 2 回の協議会の際に海ごみ情報センターのこちらのページを見ながらご説明させていただきまして割愛させていただきます。記事数としては 15 件の記事を掲載させていただきました。そして、facebook、Instagram では業務の合間をみまして多岐に渡る内容を掲載しております。海ごみ情報センターの HP などと違った内容で掲載するような形で更新しております。環境スタディツアーなんですけども、対馬の漂着ごみの現状を学ぶ海岸視察と対馬の美しい自然を体感するシーカヤックをセットにしたツアーを計画中ということで、こちら常にご報告させていただいております環境スタディツアーなんですけども、こちらは 14 件ということで、修学旅行が 3 件、企業ツアーが 8 件、大学が 2 件、小学校が 1 件に対してのツアーを敢行しております。こちらは私共独自の自主活動でございまして、委託していただいておりますボランティア海岸清掃やトランクミュージアムの方と被る部分があるんですが、こちらの件数としては 14 件ということでカウントさせていただいております。最後のページになりますが、これらをまとめまして、人数と件数ということで記載をさせていただいております。最終的な普及啓発の目標人数は 1,300 人として私達は目標として立てておりましたけれども、最終的には 1,381 人に対しての普及啓発を行ないました。ただ、こちらの数字なんですけども、あくまでこちらの記載してあります数字をカウントしているものでございまして、弊社に来られました新聞記者さんとかトランクミュージアムを使用せずにパワーポイントを使用した授業なども多数行なっておりまして、純粹な普及啓発人数といたしましては 1,500 人ほどはあるんじゃないかと考えております。そして、先ほど糸山委員長から冒頭でお話がありました、皆さまにお配りしております記事のことにしまして、こちらでご報告させていただきたいと思っております。皆さまのお手元にございます別紙で長崎新聞に掲載されております部分をお配りさせていただきました。こちらは 1 月 29 日(日)に掲載された記事なんですけれども、私たちの活動が地域再生大賞の準大賞というものに選んでいただきました。この地域再生大賞というものがどういったものかといいますと、長崎新聞社など地方新聞 46 紙と共同通信社が地域活性化の取組みを表彰するというものでございまして、立候補というわけではなくそれぞれの地方紙 46 紙がその地方で活動を行なっている団体を見つけ推薦する、その中から審査員の方々がどのような形で地域に貢献しているのか、地域再生に取り組んでいるのかというものを評価されて、その

中から大賞、準大賞というものを選んでいくというものであったようです。流れといたしましては、昨年の夏ごろに長崎新聞の手島さんという対馬の記者さんがいらっしゃるんですが、その記者さんから、対馬 CAPPА さんをぜひこの大賞に推薦したいので、対馬で取組んでいる内容、活動の写真などを送っていただきたいということでお話をいただきました。それから ZOOM で審査員の方々と直接お話して審査される ZOOM インタビューを2回敢行させていただきまして、そこで2時間ほどのインタビューを受けました。どのような形でこの様な準大賞をいただくことになったのかというと、質問されたことがいくつかございまして、この審査員の方々は決して海ごみの専門の方々というわけではなくて、地域再生に関する審査員の方々でしたので、まず海ごみに対しての知識がそんなにないというところから始まりました。ですので、海ごみについて、どうして対馬が海ごみのホットスポットと呼ばれてるのか、どうして世界で一番海ごみの漂着する島として知られているのか、その根拠はどういったところですかということを知ることができましたので対馬の地理的位置を逆さ地図を用いましてご説明させていただいて、大陸から朝鮮半島や中国大陸の方から流れて来るところが黒潮に乗って対馬海峡や朝鮮海峡に入ってきて、そしてリマン海流から流れて来るところで、日本海峡の中に入って出られなくなる、そこで対馬に引っかかるような防波堤のような形に対馬がなっているというような私達はよく理解している話なんですけれども、そのようなところから説明をするという流れでございました。また、中間支援組織というものは何なのかということを知ることができましたので、他のところにはないものですので、行政と民間の間に立って、どちらだけではなし得ないようなことを成し遂げていこうとそういった取組みをしている団体ですというようなこと、当日はもう少し詳しくお話させていただいたんですけれども、中間支援組織についてお話させていただきました。また、やはり海外との連携ということも着目されまして韓国とよく連携をされているということなんですけれども、韓国は近いので分かるが、他の国とは予定はないのかということを知ることができましたので、環境政策課の阿比留課長様も以前からおっしゃられている通り、中国との連携もこれから視野に入れていきたいということで市が動こうとしていますので、私達もそれに準じて中国の方、他の海外との交流も進めていければというお話もさせていただきました。それから地域再生大賞ということで、他の団体との交流はありませんかということで、単体では地域再生はできませんので、MITさん、対馬グリーンブルーツーリズム協会さん、漁協さん、九州大学さん、色んなところと連携をしまして取り組んでいますということでご紹介させていただきました。長崎大学さんに関しましては、海中ドローンを使った実証実験の方にも協力させていただいていて、そのあたりもご報告させていただきました。それから審査されるにあたりまして、資金面のことも具体的に聞かれました。中間支援組織として対馬市様からの委託を受けて業務を遂行しております、それだけでは地域再生というのは多分難しいと思われたんだと思うんですが、自主事業としてどんなことをしていますかと聞かれましたので、環境スタディツアー、シーカヤック、海ごみ授業、そういったところで、少しずつではありますが着実に力を蓄えていますというようなお話もさせていただきました。韓

国との連携につきましては草の根交流的なものもしております、ソンハンビくんという韓国の青年が私達との交流について韓国のお外務局の企画するイベントで賞をいただきまして私達も表彰状をいただいて楯もいただいたということもありまして、そういった草の根交流的なこともご紹介させていただきまして、様々な 3 時間にわたるインタビューでしたので私達の活動を理解していただくために細かいところまでお話させていただきました。その結果準大賞ということで栄えある賞をいただきまして、比田勝市長様からもご祝電を賜りました。私達がこの賞をいただくことの何がよかったのかと申しますと、活動が表彰されたということよりもこれに関しまして賞をもいただくことで対馬の海ごみに関して様々な方が注目していただいて、こういう状況なんだ、こういう活動をしている団体があるんだということで着目されて、対馬の海ごみのこれからにもっとやりやすい環境になっていくんじゃないかなというところを嬉しく感じました。こういった大きい賞をいただいたことに恥じずにこれからも海ごみに関して邁進していかないといけないなというところで感じた次第です。長くなりましたが、私の方からは以上です。

糸山委員長：はいどうもありがとうございました。対馬市の普及啓発の取組みということで、基本的には対馬 CAPP が取組んでやっていることについてでしたけども、何かございませんか？

中山委員：どうもありがとうございました。素晴らしい成果をご報告いただきましてありがとうございました。1 点お聞きしたいことが、ビーチクリーンアップ、あるいはスタディツアーに参加されてるところがあって非常に印象的だったんですけど、こういった企業を、今後もボランティア清掃、あるいはスタディツアーにどんどん引き込んでいってもっと企業の関与を高めていくにはこういった企業がこういった目的を持って参加しているのかっていうところをある程度抑えておく必要があると思います。それで、いくつかパターンがあると思うんですけども、例えば地元企業さんは地元企業のプライドとか誇りとかモラルとか地元としての責任感を持って、地元の CAPP の姿を見て協力とかそういった動機をお持ちだと思うんですけど、全国企業の場合は、プラスチックを製造している企業とか、製造に関わっておられる企業は、自分達のプラスチックの製造というところに対して、廃棄物の分野でいう、拡大生産者的な生産者として自分の造った製品が造られて廃棄されたところまで考えて責任を持つという考え方が最近普及してるんですが、そういった考え方で参加しているとか、あるいは企業の CSR として参加しているとか、そういった動機というのを今後もし調査することができれば、もっとこういった企業を引き込む時に意見を参考にできるんじゃないかと思っておりますので、特に全国企業が来られた時には、そういうヒアリングを試みてはいかがかと思えました。

糸山委員長：事務局、今の質問に何か答えることはできますか？

運営(末永)：ありがとうございます。お答えさせていただきます。中山委員がおっしゃった通りでございまして、今まであくまでも個人的に海岸清掃中とか環境スタディ中に聞いたことがまとめられてなくて、表に出てなかったんですが、ただしそういったものはトランク・ミュージアム®対馬版の報告書として提出していた経緯はあります。今後企業様とお話させていただいて、実際ツアー終了時に振返りということで皆さんの屈託のない意見といえますか、感想について取りまとめてデータ化していこうと考えております。どうしてもアンケートになってしまうと、書いた本人が1人個人としてその感想を個人の持ったままということになりますよね。他に書いている人の意見が反映できないということもございしますので、皆さんに意見を聞かせていただいて、それをこちらの方で取りまとめるというような形で、実際次の来年度4月からの環境スタディについては振返りというのを設けるということをすでにお話させていただいています。

中山委員：ありがとうございます。その時に、おそらく企業側はこういうものに自分達は参加しましたということ自分の骨格にアピールするために自分のHPに載せたり報告書に書いたりして、うちの会社はプラスチックにこういう形で貢献してるんだってことを何かアピールすると思うんですよ。どういうやり方で今回参加したことをアピールしているのかということ聞ければ、企業はそういうところを重視して参加してるんだということが分かるので、もっとその辺工夫したらもっともっと呼び込めるのかなと思いました。

糸山委員長：末永さんすみません。今の話と一緒になんですけど、化学総連あたりが参加するという時には自分達が造り出している化学物質がこんなになるよという話とそれをどうするかというような話までするんですか？

運営(末永)：記録には残してないんですけど、海岸清掃など終わった際に、自分達が開発してる商品は丈夫で劣化しにくく軽いものを造っていたと。その変わり、そういったものを造ってしまうと誤って海に放置された場合は、海ごみとなって色んな悪影響を及ぼしているんで、例えば製造の段階で考え方から変えなければならぬとか、目からうろこだったとか、色んなお考えを述べられたり、実際ごみを捨てないように徹底したいですとか、色んな意見をお聞きすることができます。

糸山委員長：もう一つ私から質問なんですけど、ボランティア清掃に九州電力送配電というのが2回おいでになってますけど、電力会社さんがこうやって参加されるというのはそれこそ、何が目的なんでしょうか？電力を作り出す何かと関係があると思われてるんですかね？

運営(末永)：以前からご参加いただいてまして、九州電力豊玉発電所というのは、閉校にな

りました旧塩浦小学校がある前の海岸で閉校前に子ども達や元々そこに通われていた卒業生の皆さんに、綺麗な海を見せたいということで始めた活動に対して、その隣に豊玉発電所がありますので、トイレを貸していただいたりとかご協力ご参加いただいた経緯がございます。あと、九州電力送配電株式会社に関しましては、やはり今どうしても日本財団が大々的にキャンペーンを海のクリーン月間みたいな時に自分達も参加したいんですが具体的にどこをどうやったらよいか分からないということで、ご協力いただけませんかという経緯で申込みをいただいています。

糸山委員長:ありがとうございます。そういうことで参加するということもあるんですね。他にありませんか？この実際の去年 1 年間の活動の中で、具体的にこのようなものがありますけども。よろしいでしょうか？それではその次に参ります。議事(3)日韓市民ビーチクリーンアップオンラインワークショップの報告です。よろしくお願ひします。

運営(末永):日韓市民ビーチクリーンアップオンラインワークショップについてご報告します。29 ページが表紙になりまして、30 ページが目次になっておりますけども、こちらが別途差し込んだために、次のページが 1 ページ目になりまして、ちょっとご迷惑をおかけしますが 30 ページの後の 1 ページ目をご覧ください。今回も日韓市民ビーチクリーンアップワークショップについては、昨年同じようにオンラインで開催をさせていただきました。理由といたしましては、まだコロナの感染拡大等で自由に交流ができていないというところがございまして、何とかオンラインでワークショップだけでもできないかということで、昨年の 12 月 3 日(土)に開催させていただきました。場所はこちらの対馬市交流センター3 階の大会議室で開催をさせていただきました。今回は参加者は高校生が 25 名、韓国の外国語大学から 19 名、それから一般でながさき海援隊が 8 名で 52 名ほどの参加となりました。今回のワークショップにつきまして、概要というか、プログラムがございます。別紙 1 をご覧ください。昨年は韓国のおごみの状況を知ろうということで、韓国海洋大学の先生に講演をしていただきました。その先生から韓国のおごみの現状と、それから全体的な世界的な海ごみの現状についての講演を行ないました。今年のおごみクリーンアップオンラインワークショップにつきましては、今委員をされております小島様にお越しいただきまして、今度はご講演をいただきました。こちら世界的に実際どうなっているかということも含めまして詳しくご講演をいただいております。小島様のご講演の内容につきましては、参考資料としてこの本の後ろに小島様の了承を得ましてその時のプレゼンテーション資料を添付しておりますので後でゆっくりご確認いただければと思います。今回のディスカッションの趣旨ということで、それぞれ分かれてディスカッションを行なったのですが、ボランティア普及活動を具体的にどのように取組んでいくかといことをテーマにしました。実際今コロナの状況で中々不特定多数の呼びかけ、大規模な海岸清掃等はできませんで、実際今日資料 2 で報告をさせていただいた通り、企業 1 と団体とか、ある程度濃厚接触が分かるような範

囲での海岸清掃等が続いております。もちろん今韓国との交流というのが実質物理的には対馬の方にお見えになってない状況で、このようにオンラインでの開催ということが続いておりますので、じゃあ具体的にコロナがそういった部分で解放された時にどういった取り組みをしていきたいのかということを中心に話させていただきました。6ページ目に、別紙3、その時のグループ毎の内容をまとめております。それぞれグループA、グループB等ありますので、グループAの中で出た意見というのが、すでに出てしまった海洋ごみについて直接拾う活動を続けていきたいと。そういう意見が出ました。根本的な解決のためには多くの人に周知してもらおうと、知ってもらうことが大事ということ。知ってもらう方法としてはポスターを作成して掲示することや、ポスターをSNS等の広告に載せるという具体的なことでしたり、文字だけでは誰の目にも止まらないと思いますので、例えば、JEANの小島様のプレゼン資料にあったような動物に網が絡みついたような写真とか映像とかそういった具体的に衝撃的な映像だったり写真を見ていただくのが大事ではないかというような意見が出ております。グループBにつきましては、ボランティアの清掃に積極的に取り組んでいきたい。それから清掃に参加している人達との、ごみを拾うだけではなく交流を深めて新しいボランティアの活動の輪を広げていきたいというような意見とか、対馬の海岸はごみが多いというイメージが定着しているけど過去の対馬の海岸はもっと美しく綺麗だったので、今の若い世代にその綺麗だった海の素晴らしさを認識してもらうのはどうかというような意見も出ました。ここは対馬市環境政策課様と来年に向けてこういったところも具体的に話をさせていただいております。それから次はCグループにつきましては、海に入ってみると釣り人のごみを減らすことが大事だということがよく分かる、これはダイビングをされる方のご意見でした。そもそもごみを減らす方法を考える必要がある。それから、プラスチックから再利用できる物質に変えて製品を作っていないといけないのではないかというような意見が出ました。Dグループにつきましては海ごみに関連のある地域外だと海ごみに関する授業や学ぶ機会がない。それからこれは韓国の釜山外国語大学の生徒からだったのですが、韓国では海ごみについて学ぶことはあまりないというような意見いただいております。それから、これは日韓のビーチクリーンアップ、実際の海岸清掃の部分に絡めてなんですが、韓国の方と海岸清掃する時にはお互いを知る時間を設けた後に海岸清掃をした方が良いのではないのでしょうかと。やはり海岸清掃だけではなくて色々コミュニケーションを取った上でそのようなことをした方が良いのではないかという意見が出ました。韓国ではコロナになりデリバリーが増えたので容器をリサイクルできるものに変えた方が良いのではないかと。これは私共も実際思ってるんですが、コロナのために衛生上、そういったプラスチック容器というのは逆行して増えていたのではないかなと思います。リサイクルできたり、繰返し使えるものに変えていくことは大事じゃないかと思いました。それからEグループ、まずは参加するという意識を持つと。これは自分事として海ごみ問題を考えてくださいと。それからどんなことが出来るかという会議や話合いの回数を増やすことが大事。韓国だけではなくて色々な国の人と海南清掃したり、場所を問わず海ごみの

学んでいきたい。これは先ほどから出てるように、韓国だけではなく、今後は中国、その他東アジアとも考えて色々と会議等が出来ればという検討をしております。最後の F グループ。景品を使って大人も巻き込んだごみ拾い大会を行ない、海ごみのひどい現状を知ってもらう。景品(お酒)って書いてまして、皆さんが全部お酒飲みではないとは思いますが、高校生からはそのような形で、やはり大人のマナーが悪いんじゃないかと見えてこういう発言になったんじゃないかと思います。それから、大人が集まる場所(会社や大学)で講演する。これも同じようなことが言えると思うんですが、子ども、学生よりも大人の方もマナーをもうちょっとちゃんとしないとイケないというご意見をいただいております。次の 9 ページに対馬高校と釜山外国語大学、それから長崎大学ながさき海援隊の参加者名簿も添付しております。それから一番右の備考というところに 6 級とか色んなことが書いてあると思うんですが、こういったグループを分けて討論をする際に、日本語が堪能な釜山外国語大学の韓国の方、それから対馬高校の国際文化交流科といたしまして、韓国語が堪能な日本の学生、それをグレードごとにある程度配分して分けている会議になってます。通常国際的な会議といいますと、前に清野先生がおっしゃったんですけど、英語が主になって会議をするというのが通常の流れだと思うんですが、やはりこれは対馬という独自性で考えて、韓国語と日本語が入り混じった会議になります。そして普通科の生徒に関してはどちらもそんなに堪能ではありません。ただし韓国の方にサポートいただいたり対馬の高校生の韓国語が喋れる方にサポートいただいたり、お互いに協力をしながら、何とか言葉は完全じゃないけども心を伝えようとしてるその行為そのものがさっきも中に出てきた交流という部分については重要ではないかと思っておりますので、今後もできたらこの形式でやりたいなということでこの部分については考えております。ワークショップの活動報告については終わらせていただきます。

糸山委員長: はいどうもありがとうございました。何かご質問はございませんか？ ちょっと私が聞いていいでしょうか？ F グループの真ん中の辺りに大人の方はそういうものに敏感ではないという、ある意味子どもから見た大人とはそういうものだという感じで書いてあるわけだけど僕は必ずしもそうは思えないんですけど。どっちが敏感じゃないかという、むしろ子どもの方が敏感じゃない時がいくらでもあります。私の目の前でポイ捨てする子どもがいたり、だからその時に君、君と呼んでそんなことしちゃいけません。あなたちゃんと自分で出したごみは拾って持ち帰りなさいって言ったことがもう何度かあるから。ここに書いてある大人の方はそういうのに敏感じゃないというのは本当は嘘なんじゃないかなという気がしてます。僕は基本的にこのごみの問題は元々ごみをポイ捨てしないということから始めないとそれは治らないです。そのことがどこにも出てこないということは本当からいうと奇異に感じました。私の言ったことで答えることがありますか？

運営(上野): ありがとうございます。おっしゃったように、子どもたちも私共も、トランク・

ミュージアム®対馬版を使って学校に行くんですが、感覚としては分かっているんですが、実感として伴ってない場合も多いと思います。そののところ私達も何とか一緒に学校関係の皆さまと一緒に教育していきたいというのがあってトランク・ミュージアム®対馬版というのを使わせてもらってるんですけど、地域の育成が私達も最も大事だと思います。見慣れた海岸がいつも汚いと中々そうはいっても、という形にはなるんですが、今確かに委員長がおっしゃったようにそういうこともあるんですけど、高校生の意見は、そういう感じが、大人には無関心な方達も多いということを素直に言ってるんじゃないかと私共も納得はしたんですが、今おっしゃったように、小さい子ども達は、感覚としては、教育の場ではそういうことは分かっているんだけど体感としては中々理解してないなという時はあります。

事務局(阿比留) : 委員長、対馬市からも。今現在対馬市では環境基本計画を策定中でございます。その中の大きな柱としてESD。やはりこのSDGSとか環境といったものの教育、小学校、中学校を主に3つごの魂百までじゃないですけど、子どもの時にそういう環境に対する教育をしっかりしておけば将来的にはそれが定着していくと。お父さんお母さんがそういうこと(ごみを捨てたり)していれば、そういうことをしてはダメよという注意をするのがもしかしたら子どもだったりするようになってきて、大人もそういったところを注意されればまた気をつけるかもしれませんし、そういうESDを大きな柱として教育委員会の方にも話をしながら、子ども達の環境に対する意識を高めていくことは非常に大切だと思って今後、教育委員会の方になりますけども、そちらの方も力を入れていきたいと考えております。

糸山委員長 : ありがとうございます。ごみ問題としていうならば、本当からいうと、ごみの分別というのが一つ。すごく大きな問題ですよ。ちゃんと分別をして、それを所定の位置に排出すると。それが必ずしもうまくいっていないという時が多々見受けられるということです。分別をするということが、本当はそんなに優しいことではないということなのかと普通に思ったりするんですけどね。他に何かございませんか？

大庭委員 : 環境省の大庭ですが、この取組みで、参加者ですけど、対馬はすごく一生懸命やっていて、行政が入ってますけど、韓国側は大学生メインになってます。例えば、行政としての取組みでやってもらうんだったら釜山市に声をかけて入っていただくとか、そういうことはお考えになってたりするんでしょうか？

事務局(阿比留) : 事務局の阿比留でございます。今のところ、釜山外国語大学とのこういう取組みでございまして、将来的には対馬市は釜山市の中にあります影島区とかウルサン市にありますウルジュブンというような姉妹縁組をしているところがございます。中々釜山市となりますと、非常に規模が大きくて中々レベルが合わないということころがあり

ますので、そういった区との連携をやりながら、そこを広げていきたいと考えておまして、コロナ禍が明ければ、そういう取組みを広げていきたいなという構想を持っております。

大庭委員：もう 1 点お聞きしてよろしいですか？海岸漂着ごみは対馬市はすごくいっぱい出ていて問題になってますけども、釜山でも同じような漂着ごみって来ているんでしょうか？その辺ご存じでしょうか？

事務局(阿比留)：聞いた話ではありますが、コロナになる前に釜山の方で日韓のワークショップを実施した折には、海岸に行った時でもごみの回収のボランティアをした経緯があるのですが、あまりなかったと聞いております。やはりヘウンデとか観光ビーチであれば清掃員がかなり清掃しますし、風の影響とかありますので、もっと西海岸の方に行けば中国のごみがあるのではないかというように感じますが、その辺りは小島委員がご存じじゃないかなと思います。

小島委員：何回か韓国の海岸に実際に調査とか、向こうの団体と一緒に周ったことがあるんですが、今阿比留さんがおっしゃった通り、韓半島の黄海に面している西南地域は自国発だけではなくて他の地域から漂着したものが多く見られます。特に小さな島しょ部がございまして、そういったところは住民の数も少なかったり、清掃が必ずしも行き届いているわけではないです。釜山の隣のコジェというところがありまして、ここは牡蠣を始めとする水産業の養殖が非常に盛んで、ここでは大量の発泡スチロールのごみが発生して使用済みの古くなったものを積極的に回収するというのも行政の取組みとしては行なわれていますけれども、中々全部回収はするという状況にはなっていないので、一部流出したものがおそらく日本の海岸にも漂着しているものだと思います。

大庭委員：分かりました。そうすると同じ悩みを抱えているもの同士がマッチングするといっているのでそういうところに声をかけて広がりを見せていけばもっといいかなと思います。

事務局(阿比留)：ありがとうございます。今後、先ほどから色々とお話があります通り、韓国だけではなく、中国とか東南アジアの方からのごみもたくさん打ち寄せております。環境省の方は色んな国際会議に参加されていらっしゃると思います。そういった会議の場でもしよろしければ対馬市の時間を作っていただいて、10分でも15分でもいいので、こういう対馬市の現状があるということを、中国や東南アジアの方々にも発信をしたいなと思いますので、環境省の方にも今日のようなことをご報告いただきまして、国際会議の折に何か時間を作れないかというようなことも進めていただければと考えております。

大庭委員：伝えておきます。

中山委員: 今中国の話が少し出たんですけど、私今廃棄物資源循環学会の国際委員会で外国の国際的な緊急会議の運営をやらされているんですが、今年中国の中で海洋プラスチックの研究をやっている人を探して、その人に講演をしてほしいと依頼してくれといわれまして、中国の友達先生に色々聞いて、天津大学の先生で渤海のプラスチックのモニタリングや中国のプラスチックに対する製作のレビューをやっていただいた経緯がございますので、そういったところからのチャンネルがございます。それと昨年11月に日本と中国の廃棄物研究者が集まる国際ワークショップを開催して、その中でプラスチックの研究をされている中国の研究者の方何名かおられましたので、そういったところの中で発表の場を設けるとか、廃棄物資源循環学会が毎年3月に3RINKSっていう、3Rのインターナショナルカンファレンスっていう頭文字を取って3RINKSっていうんですけど、それをやりまして、その中で特別セッションやプラスチックのセッションが必ず毎年ありまして、アジア地域の研究者の方たくさん参加されますので、今年の申込みはもう終わっちゃったんですけど、来年また機会があれば、もしそういう話をしていただけるとできれば対馬の紹介をこの中に入れ込みますので、言っていただければと思います。

事務局(阿比留): ありがとうございます。ぜひお声がけいただければと思います。中国に色々なチャンネルをお持ちということで、またご相談させていただきたいと存じますが、やはり、先日鹿児島の大崎町というところ。日本の中で今リサイクル率がNO1、84%がリサイクルされている町がありますけれども、そちらの方に行きまして色々とお話を聞いてきますと、外国には焼却場がないそうですね。ほとんど。なので埋め立てるしかないという国が多いそうですね。それで、日本みたいにゴミ箱に入れば焼却場までのルートが確立しているような国ではないところが多くて、やはり、中国も日本も世界NO2でございましょうけれども、多分ゴミ箱に入れても焼却場がない場合は埋め立てる場合、そういうルートがまだ確立されていない地域も広大ですからあると思うんですね。そういった時に大雨とか大風とか台風とかがあれば、黄河とか揚子江とか、そういったところに流れ出てそれが東シナ海、日本海の方に流れ出て来るんじゃないかと思われまして、そういったところの政府にもこういった情報をちゃんと受け取っていただきたいと思っています。

糸山委員長: 私からも一つお聞きしたいんですが、ここにAグループからFグループまで討議した事柄が書いてありますよね。この時に、これは日本の学生が言ったこと、韓国の学生が言ったことというのは、分けて書けるのでしょうか。

運営(末永): 各グループごとに話をしてもらっていますので、分けて書く事は可能です。

糸山委員長: 僕はこの文章を読んでいて、あまりに自分のこととしてのごみ問題にはなっていないですよ。ここに書いてあることは、ごみ問題を客観的に見て何か話をしているという、

そんな感じ。本当に自分が捨てたものが海に流れ出ている、これはまいった、これはまずかったというような話では、ここに書いてあることは全然違うと思う。僕は、ここに書いてあることは、通りいっぺんなことしか書いてない。僕はそういうやり方は変えていくべきだと思います。もう少し、それぞれの国の状況がもっと出てくような話が出てきて当たり前です。どこのどんなものを読んでもそうですけども、韓国のごみが相当多いということはみんな知ってることです。にも関わらずそういうことが全然出てきてないというのは、そんな話をしてないということです。だから僕はその点ではここに書いてあることは正直言って、本当にこんなこと言っているのか、もしくはこんなことしか話をしてなかった会議かと思います。他にございませんか？

舍利倉委員：今の件について。今回オンラインで各グループそれぞれ会話をするんですが話がしづらかったのかなと思うところもあります。話が進まないといいうような。過去、釜山に行ってワークショップする、釜山から対馬に来ていただいてワークショップする、そういった時の成果としては韓国の学生は、ごみの勉強をもっとしないといけなとか、町中、行政が仕事で清掃してくれるのでポンポン捨てっぱなしで、自分達が悪いというような意見もございました。対馬の学生からも逆に韓国はもっとごみ問題を勉強すべきだとかそういう意見も過去の中では出ておりました。

糸山委員長：はいどうもありがとうございます。他にありませんか？

中山委員：事務的な話なんですけど、この財源とその持続性はどうなんでしょうか？今回オンラインでお金がかからなかったと思うんですが、人を連れて行ったり連れてきたりすると教育に宿泊費とか、特に学生が増えるとお金がかかると思うんですけど、今財源は環境省とか市の自治体の財源だけでやっておられるのか、それとも企業から何か、企業もこういう活動を応援したいという企業たくさんあると思うんですが、そういうスポンサー的なものもやっておられるのかちょっとそこだけ教えていただけたら。

事務局(阿比留)：ありがとうございます。基本的には環境省の補助金でございます。9割助成の補助金がございます。あと1割は市の一般財源になりますけど、その内、企業版ふるさと納税というのがございまして、そちらの方で多くそこを賄うことができていますのでございます。色んな企業と連携をしているところがございますので、そういったところが感心を持って企業版ふるさと納税をしていただいております。以前は10割助成だったんですよ、環境省も。色んな取組みをやはり日本海に流れ込む海ごみを対馬でせき止めてかなりの数、4分の1、5分の1ぐらいにはなりますけれども、回収しているところで、やはり10割助成に戻してくださいということを継続しているところがございますけど、対馬のごみもあるということもあるんでしょう。そういったところで9割助成になっているところで

ございます。助成金についてはずっと続くものと認識しております。

糸山委員長：どうもありがとうございます。他にございませんか？ないようならば先ほども言いましたように 10 分間ほど休憩をしたいと思いますますがよろしいでしょうか？それでは 3 時 55 分からよろしく申し上げます。

糸山委員長：それでは後半を始めたいと思います。よろしく申し上げます。(4) 対馬市海岸漂着物対策推進行動計画の発生抑制に関する実施状況の確認と評価、資料 4 と資料 5 です。

運営(末永)：はい。対馬市海岸漂着物対策推進行動計画の発生抑制に関する実施状況の確認と評価ということで、資料 4 と資料 5 を使いまして説明をさせていただきます。先ほどの日韓の海ごみのワークショップのページから数えていただいて資料 4 というのが、海ごみワークショップの続きの番号で言いますと 11 ページの次が資料 4 になります。資料 4 と資料 5 というのは、資料 5 で分かれている部分をこの資料 4 にまとめた形になってありますので並行して説明をさせていただきます。まず、資料 4 の 1 ページ目をご覧ください。今まで 3 回の会議を今を含めて開催中なんです、1 回目に体制づくり、2 回目の会議で回収処理に関わる話をしていただいています。今回が発生抑制対策、普及啓発、その他のごみ、その他の活動ということで、この部分を今ご報告を申し上げているということになります。この中で変わった部分ということで、発生抑制対策の下の方、対馬島内での発生抑制対策として、不法投棄の対策番組、先ほど触れましたが、対馬市 CATV で大人の方に向けた発生抑制の番組を今制作中でございます。それから、独自にポリタンク、ペットボトル等の漂流状況等の実験・考察を行なっているということで、これは第 2 回の発表で上野の方から発表があったと思うのですが、こちらも対馬の独特の韓国からの青いポリタンク、そういったものの調査強化をしていきたいと考えております。その他の活動としまして、今回海の事故 0 キャンペーンの一環として対馬海上保安部様の方からお声をかけていただきまして、一日海上保安官として弊社理事の私の隣におります吉野が一日海上保安官ということで活動させていただきました。次のページをおめくり下さい。資料 5(1)、こちらにつきましては、今この対策として漂着物のトランク・ミュージアム®対馬版を用いた普及啓発を開始しております。資料 2 でご説明した通り令和 4 年度は 23 回の活動がございました。今後の実施の内容として番組制作をやっていきたいということと、中高生や大人の研修旅行等が増えていきますので、そういった大人の方々にトランク・ミュージアム®対馬版と並行して写真、パワーポイント、それから映像等を使って対馬の漂着ごみについてもっとリアルに色んな情報等も盛り込みながら、新しい研修内容を作っていきたいと考えております。最近の進展の内容といたしましては資料 2 でご説明させていただきました、対馬博物館でトランク・ミュージアム®対馬版を令和 5 年の 1 月 14 日から 20 日まで実施をしました。この中でももちろんトランク・ミュージアム®対馬版を展示したということ、日々の私達のモニタリング調

査の状況でありましたり、対馬の海ごみの問題でありましたり、対馬が今機械を入れましたリサイクル機器の状況でありましたり、実物としてはマイクロプラスチックを手袋をして実際触ってもらうというような展示も行ないました。そういったことで子ども達は非常に興味を持っていただいたと思っております。次めくっていただいて、資料 5 (2) がございます。これにつきましては資料 2 と関連した報告内容でございます。活動計画の実践の評価ということで、令和 2 年度から令和 3 年度対馬市海岸漂着物対策普及啓発の行動計画というのを毎年更新して作成しております。次のページを見ていただきたいのですが、ボランティア活動等に例えば数値目標とか、営業的なものを設けるのはどうかというご批判もあるかと思うんですが、私共が活動をする際に年間やはりこれぐらいの人に普及啓発をしたいとかこれぐらいの活動を行ないたいということを計画的に数字にして出した方が私共も張り合いがありますし、どれだけの人に具体的に効果があったのか、啓発したのかという意味におきまして、これもノルマという形ではないんですが、目標としてこういう数字を掲げております。こちら目標件数と実施件数ということで書いておりまして、止まっているのが 4 の日韓交流海ごみワークショップ IN 釜山ということで、影島区と対馬市が姉妹都市を結んでおりますので、そちらの方に対馬の方から高校生を釜山の方に派遣して海ごみのワークショップを行ないました。それと海の現状を釜山の方に海岸視察を行なったんですが、先ほども話がありましたように釜山の海水浴場は非常に綺麗なんですよね。ただし、道路上や商店街はポイポイごみを捨ててあるのが目についたりというような状況もございます。ただしそれは有料でそれを回収するお仕事をされていらっしゃる方がおられますので、その方々が人が通った後に一斉にごみを回収して、朝は綺麗な状態に戻っているという、そういうところも見ていただいて肌感覚で分かってもらえたんじゃないかなと感じております。これが今新型コロナで止まっておりますが、今後高速船も OK になりそうですので、ぜひまた再開できればいいなと考えております。それから環境スタディツアーでありますとか、イベントや会合等における海ごみの説明ということで昨年 3 月 20 日に十八親和銀行様と海岸清掃をさせていただきました。色々ご協力をさせていただいて、今回は資料 2 で報告がありました通り十八親和銀行様の太田支店の方で 3 日間トランク・ミュージアム®対馬版の展示で海ごみの普及啓発をさせていただきました。また報告書を提出して、県の方でお話をいただいている案件というのはございまして、JEAN の小島さんへも了承を得まして長崎県のイオン太田店、東長崎店、大塔店にトランク・ミュージアム®対馬版と対馬の海ごみの写真等の出展をさせていただきました。これは、今報告書を提出中でございまして、向こうの方で確認中ということで、今回は間に合わなかったんですが、次回に報告を上げたいと思います。その場合、この 1,381 人というのは、店舗だけでも超えておりまして 2,066 人来場者がありまして、そこで具体的に 311 枚のアンケートを回収しております。長崎県の方に了承を得ればそこについてもご報告を申し上げたいと思います。めくっていただいて、資料 5(3)ですね。これにつきましても、島内の不法投棄やポイ捨てゴミの削減を念頭に置いた普及啓発活動や環境学習活動を実施発展させるということで、今現状では平成 31 年度

より対馬島内の団体と月に1回の海岸清掃をそこらの方に決めてたんですが、コロナで不特定多数とは中々できなかったんですが、対馬島外の方とボランティア受入ということで海岸清掃等具体的にやらせていただいております。それから、次のページで平成30年度から対馬市は不法投棄のパトロールを開始されております。次、資料5(4)、これも発生抑制対策、韓国等との協働と進展ということで、情報共有であったり連携ということで、現状は令和4年12月3日に日韓市民ビーチクリーンアップオンラインワークショップを対馬市交流センターで開催しました。やはり今後もこういったものを継続して行ないたいということ、コロナの方も落ち着いた状況でありますので、次こそは実際に韓国の方に来ていただいて一緒にごみを拾っていただきたいなと考えております。先ほど資料3の報告の時に委員長の方から(気持ち)が込もってないのではないかとお話がございました。もちろんオンラインで実際に海ごみを回収してないという状況であると、確かにその一般論としての会話が多のかなということもありますので、実際に対馬のあれだけのごみを目の当たりにしていただいて回収することこそ必要と考えております。次のページめくっていただいて資料5(5)ということがございます。その他のごみということで、漂流ごみ、海底ごみ対策ということになります。以前長崎大学の方のプロジェクトとして海底ごみを撮影したりとかそういったこともあったんですが、前回の第2回の協議会の弊社の上野から説明のありました、ペットボトル。海底にあったんじゃないかというようなものが打ち上がっていました。台風の後。そういった事も含めて継続的に海底ごみがどこにあるかとかそういったことについても独自に調査をしていければと考えております。もちろんその調査結果につきましてはこの協議会で情報を共有させていただきましたり、委員の皆さまのご意見をお聞きして対策に役立てるように大事に扱っていきたいと思いますので、ご協力をよろしく願います。資料4、5の説明につきましては以上です。

糸山委員長：はいどうもありがとうございます。ただ今の説明について、何かご質問等がございませんでしょうか？

川口委員：資料4で○とか△とか×とか評価が付いているんですが、発生抑制対策の発生抑制対策が2つとも△になっているんですが、これはどういった理由で△なのでしょう？

運営(末永)：発生抑制対策はできる限りのことは今やっている状況なんですが、まだまだ追い付いていないところもありますし、こちらとして計画している中で対馬市海岸漂着物対策推進計画というのがあるんですが、その評価に基づく、まだうちの方として足りてないという部分につきましては△の評価をしております。

糸山委員長：では、具体的にどの程度までいけば○がつくんですか？

運営(末永)：その辺りのところが、少し主観が入ってしまうので難しいところがあるんですが

糸山委員長：構わないですよ、主観が入っても構わない。

運営(末永)：書いてある状況といいますか、文言としてまだ実施できてないというようなこともあるんですね。例えば不法投棄の話でありましたり、普及啓発活動についても、例えば今回でいうと漁協さんの方との協力ということで、10件ほど漁協の協議会であったりで説明や普及啓発をするという目標があるんですが、今回行なったのは女性部の犬束委員の女性部連絡協議会で1回だけです。協議会が終わった後に海ごみの説明ということで、弊社の上野と私で説明をさせていただいたんですけど、例えば他の部分では全く説明等も行っていないということで、そういったところが目標件数を含めて普及啓発の件数と効果というのがはっきり分かれば○になっていくんじゃないかと思います。非常に前と比べると○が増えてきたとは思っております。

糸山委員長：本当に○が増えてますよね。とっても見やすくなったんだと思いますけど、先ほどのご質問、分かりました？

川口委員：今説明していただいて、非常によく分かったんですが、主観が入ってしまうところがあって、これがどうすれば○になるのかなっていうのが資料からはちょっと分からなかったから、令和5年度に何をすべきかと思っていて、実際これとこれはできたけどこれはできなかったというような資料のまとめ方をさせていただくと、じゃあこの部分はどうしたらいいんじゃないですかとかそういう具体的な話合いができるかなと思ってちょっとお尋ねさせていただきました。ここからは意見になってしまうんですけど、発生抑制対策の中で、島内での発生抑制というところで、先ほど子どもをESDというか、子どもへの教育で子どももあんまり意識が高くないんじゃないかとかご発言も委員長の方からあったんですけども、対馬でのごみ問題に関する体験学習っていうのが、割と目立つので、海ごみに偏っている気がするんですね。というのも、海岸清掃を一緒にするとかそういったことってすごく大事だと思うんですけど、実際私が小学生だったら、海ごみを一緒に拾ってこの海ごみは大変なことだということは分かるんですけど、じゃあ私はどうしたらいいのかっていうところってあまりに遠すぎてピンとこないというか、分からないと思うんですね。海ごみに対する教育っていうのもとても大事だと思うんですけど、それと並行して海ごみになる前のごみっていうのがどう処理されているのかっていうのを学ぶ機会が逆に対馬はないんじゃないかと。海ごみが目立ちすぎるので、ですから家庭でごみを捨てる時にどうやって捨てたらいいのかとか、それが実際安んずの処理センターでどのように処理されているのかということを見る機会がないゆえに、家でちゃんと分別しようよっていうのが、海ご

みと結びつかないんだと思うんですね。隣のゆかりさんの丸徳水産さんでは出るごみをどうするかっていうところを企業として一生懸命取り組んでおられて、そういう、自分達の生活だったり自分達の事業だったりですべてどうしていくかって考えていくための普及啓発って、多分海ごみよりももっと手前のところであって、私が小学校か中学校の時にゴミ処理場の社会科見学に行った覚えがあるんですけど、それは並行してやらなければいけないことじゃないかなと思っていて、私もこの会議の中で安神のクリーンセンターに行かせてもらって、すごく衝撃だったし、それが並行して一般のごみがどのように処理されているのかっていうところも併せて学びたいなと思いました。以上です。

糸山委員長：ありがとうございます。ちょっとそのところを対馬市役所に聞いてみましょう。

事務局(阿比留)：ありがとうございます。実際にクリーンセンターを見学されている学校も多数ございます。やはり学校の先生の意識とか取組みによってもそういったところを見学したりとか、海ごみを回収したりとか、学校ごとに温度差があるようなところはあるようでございます。それを教育委員会の方にもお願いしまして、今ふるさと学習を主にやってらっしゃるんですけどそういったところにこの海ごみしかり、その手前のごみの分別しかり、ごみの処理方法しかり、どのような形で再資源化をされているとか、焼却をされているとかいうようなところの勉強もしていただきたいと感じております。あと分別に関してなんですけども、まだまだ対馬市の場合は12品目といったところで、まだまだ少ない感じが私にはしているところなんです。というのも、隣の島の壱岐は22品目をされております。回収方法もやはり違うんですけども、昨年4月1日からプラ新法というプラスチックの新しい法律ができて、先ほどの企業の方も、再資源化なるところまで考えた製品を造っていかなくちゃいけないというところまでを努力義務として課せられているところがございますけれども、まだまだ、その取組みが、法律は施行されているんですが、自治体として取組みを進めているところはまだまだ少ないんですね。そういったところがあるんですが、この対馬市は海ごみと併せて、そちらの方にも手を付けていきたいと考えております。やはり分別品目を増やしていくのもその中にも含まれますし、子ども達はその現場を見てこうしていかなくちゃいけないということを小さい時に印象深く学習することは非常に大切だと思っております。そういったところは教育委員会と連携をして進めていきたいと考えております。以上でございます。

糸山委員長：ありがとうございます。今の説明でよろしいでしょうか？ちなみに私から付け加えておきますと、長崎県としても、それぞれの自治体のごみの分別に従った形で、それぞれの自治体の方々はそれに従ってちゃんとごみの分別をちゃんとやってくださいということをお県としてはやってる。一応、私は県の方の代表、いわゆる議長ですので、そういう格好

で県としても進めてはいるんですが、とにかく、言葉として言えばそれだけの話なんですけど、具体的にそこから一つの成果を作り出していくということがやはり非常に難しくはなりませんね。長崎市の場合には、今から10年ばかり前になりますが、ごみの分別収集体制を変えてそこから一気に進んだという感じがしますけれども、本当にその意味で言うと、ごみの袋を一つ追加するだけで随分変わったという感じがいたしました。そう意味でいうと、どこかでそういう議論を対馬市もやらなきゃいけないんじゃないかなという気はしますね。何か他にございませんか？

犬東委員：この前漁協女性部の連絡協議会の際にはどうもありがとうございました。それから、スポーツ大会にも来ていただいて、プラごみで作られたものとか見せていただいたんですけど、すごく参考になりました。女性部にでも子どもにでも市民皆さん、私もそうなんですけど、繰り返し繰り返し何度も聞くことだったり見ることだったりすることで意識が変わると思うんですよね。今後も女性部活動のイベント等にはぜひお越しいただいて、色んなことを教えていただきたいなと思っていますのでよろしくお願いします。

糸山委員長：ありがとうございます。本当は、そういう成果がきちんと出てくる、それが見えるようになるといいんですけどね。説明がしやすくなるので。他にございませんか？

犬東委員：それと、私達漁協女性部では、見えないごみ、家庭排水に出てしまう洗剤のごみのことはみんなよく語り合ってますよね。私自身も粉石鹼を使っています。うちの飲食店でも、掃除とかする部分においては普通の合成洗剤じゃなくて粉石鹼を溶いてペットボトルのリサイクルしたものに入れてそれでトイレ掃除だったり床掃除だったりします。幹子さん(川口委員)の方でもシャボン玉石鹼を使ってあつたりちょっと一般の洗剤より割高なような気もするんですけど、その割高は、これで海が守れるんだったらというところで、漁協女性部はできるだけその洗剤を使い回そうというところでやっていますので、ご報告いたします。

糸山委員長：ありがとうございます。そういう地道な活動をこれから先も続けていくということですね。他にございませんか？

中山委員：日韓市民ビーチクリーンアップオンラインワークショップの活動についてなんですけど、これって市民って書いてあるんですが、参加してるのは高校生と大学生なんですけど、環境教育っていう形ですよ。見た感じが。そうすると、さっき委員長もおっしゃったように舵取りする専門廃棄物なり家庭のごみの出し方とかそういうことをある程度指導する人の事前学習みたいなのがないと、いきなり行って高校生と議論するって難しいんじゃないかと思うんです。我々大学の方でこういう国際環境プログラムってよくやっていますけど、

うちの大学から東南アジアの大学の方に10人、20人連れてって向こうの現地の学生と色々ディスカッションさせるプログラムって結構あるんですけど、その時はすごく周到に下準備して事前学習を何時間もやった上でやっとう議論ができるというか、なので今後その議論のクオリティを高めていこうと思ったら、もうちょっとこっち側で、例えば長崎大学とかで廃棄物の研究とかされてる方いらっしゃいますし、そういう方をお願いしてみるとか、そういうこともやると教育効果も上がるんじゃないかなと。ぜひ検討していただければ。

糸山委員長：どうやるかは別ですけど、今先生が言われたように、もう少し、海岸漂着ごみに限らず、いわゆる普通のごみの話をきちんとやっていくということが本当は必要なのかなという気はしますね。小島委員、今の話で、いわゆる環境教育としてのごみの教育で何か気づいてるところありませんか？

小島委員：犬東さんのおっしゃった、子どもだけではなく我々大人も、現状もどんどん変わっていきまますし、新たな対策が行なわれたことで、改善していく部分もあるので、反復してということはずごく大事なことだと思います。ただ学校の現場とかですと、どうしても授業の1コマとか時間上の制約がありますので、そこを上手く交渉して、例えば交渉して2コマ使わせてもらう同じ学年に学期中何度も行くとか、そういうことができないとやはり表面的なところで、そこから先深めるところが、現場の先生方に委ねるだけでは厳しい面があるんじゃないかなと思います。これまでの対策の実施を見ている、まだまだ島内でも学校の広がり期待できる余地が大いにあると思うので、重ねて伺えるようなところでこういう実績があったら、例えばその感想みたいなことを、もうすでにされてるのかもしれませんが、学校の関係者の繋がりですと、こういうことやってCAPPAさんに来てもらって、こういうお話を聞いて子どもの反応がこうだったというようなことが他の学校に広がっていったりすると、もっといいんじゃないかなとお聞きして思いました。

糸山委員長：ありがとうございます。他に何か感想はございませんでしょうか？ 舍利倉さんにかございませんか？

舍利倉委員：悲しい現実を申し上げます。先ほど12品目の分別の話がありましたけど、安神の開業当初からすると資源化率はやっぱり下がってきます。私平成30年に環境政策課に参りましたが、北部中継所、中部中継所、そしてこの巖原にごみの処理をするクリーンセンターがございますが、中継所に集めるごみは、一時中継所で降ろされたりするので、持ち込みのごみも見れたりするので、見るんですけど、燃えるごみの中に資源ごみが混ざって出されてる現状があるんです。ここは我々はしっかり普及していかないといけないなど。まずは分別品目増やす前に、今のこの現状を、しっかり分別していただくようなこういった普及がとても必要だなと感じている現状でございます。

糸山委員長：舍利倉さん、僕の感想を一つ。資源ごみと燃やせるごみとが混在して廃棄されている。この時に全部合わせて何か燃料にするということはできませんか？それで、もう分別してないんであればそれみんなまとめて使うということは何かできないんですかね？

舍利倉委員：先ほど課長が挨拶の中で申されましたけど、現在関西経済同友会という、多くの企業さんが一昨年、この対馬に海ごみを見に40数名見えられて社長さんなり銀行さんなり新聞社なり海ごみの現状を見てびっくりされたんです。こんなひどいのかということで。そしてこの対馬を何とかしたいということで今年度9月に連携協定を結んで対馬モデル。ごみの処理に対して何とかしたいということで動きが始まっています。ですからそういった中で今委員長が申された、ごみをいっぺんに燃やせないかとかそういったものも1つの検討材料の中に組み込まれているところもございます。ですから今後はそういったことも必要かと思いますが、近年ではそういったエネルギーに変える施設が多ございますけども今現状の対馬は二酸化炭素の排出を抑制するような形の仕組みと、あとプラごみの量によってそれだけの熱源になるようなエネルギーまでとは至らないというような規模だというようなことは聞きはしてるんですけど、ですので、将来的にはそういったことも検討の余地はあるかなと思ってはいます。まだ今平成29年から3年かけて延命措置しましたので、あと5年くらいはまだもてるんですね。ですから近い将来には関西経済同友会が今の対馬全島の現状調査をしながらどういった方策が良いのか1つの方策じゃなくていいんですね。それぞれ地域に合ったようなそれぞれで取れてごみの削減につながればと思っているんですけど、ですから今後はそういったことも考える必要もあるかなと。しかし今現状取組むべきところは、燃えるごみの半分で資源ごみの袋の料金設定してます。なぜ安くしてるのかというのは、分別にご協力いただきたいから、資源ごみの袋が燃えるごみの袋の半分の料金設定にしてるといところなんですね。でもごみ袋代が高くても混ぜて出すんですよ。この根本的な我々の性根を、どうかこの現状を伝えて、これだけ分の焼却経費が掛かってるんですよという現状を伝えながらこれから我々は普及啓発していかなければならないなと感じております。

糸山委員長：ちょっと、犬東さん今の舍利倉さんの話を聞かれて何か感想なりコメントなりありませんか？

犬東委員：ちょっとですね、私の中では、12品目本当にきちんと出したとしてそれがちゃんとリサイクルに回っているかどうか本当に疑ってます。きちんと、最終的な処分はどうなってるんだろうってよく話しますよね、ここ2人(犬東委員と川口委員)は。よく話すんですよ。ごめんなさい、疑ってますけど、大丈夫ですか？

舍利倉委員：できています。

糸山委員長：一言。疑い出したら多分こういうシステムの論議をしていた時にどうにもならなくなりますよね。基本的にはそこは信頼するということが出来上がらないとこのシステムはこれでいいのかというような話を議論していく時に先に進まなくなります。だからまずは相手の言うことを信じるということをやらないとしょうがないんだと思います。それからもう一つあるのは、これは僕の提案ですけど、本当はこの次辺りに言おうと思ってたんですけど、資源ごみと燃やせるごみは、長崎市では燃やせるごみというんですけども、そういうものが混じっている時に、全部まとめて燃やす。そしてそれをエネルギーにしてそこから電力を作り出すということができないのかということが僕の考えていることです。電気を作り出したならば、それを家庭に送電せずに、その場で作り出した電力で水を電気分解して水素がH₂とO₂を作り出す。そして、このH₂を燃料にして必要なところに持って行く。火力発電に持って行くのもいいだろうし、場合によっては車に使ってもいいだろうし、というようなことはできないのかという気はしてるんです。だからさっきあった、この対馬の海岸漂着ごみ清掃活動の中で九州電力送配電という株式会社さんが来てられるんだったら、僕はその人達にその話をしてみたいなっていう気はしてる。せっかく清掃に来てるんだから。これを燃料にして電気をおこせませんかねっていう話ができたらいいなという。正直いってそう思いました。他にございませんか？

本田委員：いいですか？私、仕事の関係で五島市に3回、10年間住んだことがあるんですが、途中でごみの仕分けが変わって、ものすごく厳しいんですよ。種類がものすごくあって。燃やせるごみ、燃やせないごみの有料の袋、それから資源ごみは、みんな白い透明なビニール袋で、安いものですね、それを使って各自家庭で仕分けをして、ごみに、回収の時に皆さん出しますけど、名前を書くんですよ。書かないと持って行ってくれない。資源ごみは必ず水洗いをしないとイケない。ペットボトル、アルミ缶はアルミ缶の中身をみんなすすいで乾かして出すんです。それが私住んでる時にその仕分けが始まって、意識づけっていうか、教育されちゃってるんですね。今でも対馬に来て、アルミ缶、スチール缶はすすいで乾かして資源ごみに出すというような状況で、今も五島市は変わらないと思うんですけど、そういうところから子どもの教育、大人の教育も始まって、今も私も根付いてるんで、ホテルなんか宿泊した時に飲料水やお茶とか飲んだ時には掃除の人たちが来る前に自然と洗って捨てて、部屋を出ていくような感じで根付いちゃってるんで、いずれ必要になるんじゃないかなと思います。

糸山委員長：おっしゃる通りだと思います。本当に日常的な活動の中で、ごみを資源化していく、もしくはエネルギー化していくということが出来上がっていくんじゃないかと。そしてそれが海岸漂着ごみも同じなんではないかという気がしてる。日常的な活動の中でそれ

をやっていくということが本当は必要なんじゃないかなということがしますけどね。私もずっと長崎市の資源ごみについては水洗いしなきゃいけないものは全部水洗いをして、長崎市はそれをしなさいとは言わないんですけど、僕はしてます。毎回。だからこういうものを捨てる時に、見たら分かりますけど、この外側の部分とペットボトルそのものは材質が違いますよね。

本田委員：そうなんです。五島の時には必ずここの材質を見るんですよ。

糸山委員長：全部取ってということを僕はしてるんですけど、だからそういうことをちゃんとやれるということが本当は必要なのかなと。それでも長崎市なんかはごみの分別を変えましたから資源化率は相当に上がっていききました。だから多分、そういうのをやっていけば、資源化率は変わっていくんじゃないですかね。

川口委員：多分対馬市の方は大方の人は犬束さんが言うように疑ってるんですよ。でもそれが多分分別してないから一色単に燃やされてる。その、一色単にして燃やされてるところが1人歩きしてるんですよ。色んな人に聞くと、分別したところで安生のクリーンセンターで一緒にして燃やされるって結構みんな言ってます。それって情報が行き渡ってないというのがすごい感じるんですよ。一色単になって燃やされるっていうのは、分別してないからなんです。そこが本当に分別しさえすればリサイクルされるものが、分別されないがゆえに一色単にされて、一色単にされてるところを見るもんだから、結局分別したって意味がないということで、そっちだけが1人歩きしてるっていうのは今すごい感じていて、本当にそこからやらないと普及率とかリサイクル率とか上がっていかないし、分別の精度も上がっていかないんですよ。資源ごみも捨てるににくいと思っていて、私、対馬に来る前に仙台市にいたんですけど、段ボールとかはくくって置いておけば無料で持って行ってくれるんですよ。でも対馬市の場合は段ボールもビニール袋に細かくして入れなきゃいけないのとかアルミ缶とスチール缶が袋にいっぱいになるまでにすごく時間がかかるので、結局12品目だったとしても家にそのごみを置いておけないというのがあって、仙台の場合は、ごみ集積場に品目ごとにボックスがあって、それにじゃらじゃらじゃらって入れれば良かったんですよ。だからすごく少量で多品目に分別できたんですよ。そこに行けば分類されているものがあるので、これはここだな、これはここだなって分けれて捨てるって行為自体がすごく教育になるんですよ。ですから資源化というリサイクル率というか分別率とかを妨げているのはなんなのかというのをちょっともっと分析して、もっと市民が取り組みやすい形に変えていくっていうのも必要なかなって思いますし、島なので一色単に燃やすことと、これはリサイクルした方が効率が良いだとかこっちは燃やした方が効率が良いっていうのを分析したら、リサイクルした方が良いもの、燃やした方が良いものってきつと

分けられるんだと思うんですね。一度しっかり予算をかけて、専門家に分析をしてもらって、対馬市に最適なごみの処理の仕方っていうのを検討してもらって、それをちゃんと市民が勉強するっていうような機会がほしいなと思います。

糸山委員長：材料についてのリサイクルの話になってくると、それに効率といったような概念が入ってくると、本当から言うと議論がものすごく複雑になっちゃって、それはもう効率という言い方をすると、燃やした方が多分、効率という言い方ならば一番手っ取り早くなってくる。先ほど言いましたように、燃やしてエネルギーにして、それで電力を作れるならば、これが一番効率的だと思います。ただ、それで作った電力を、さっき僕が言ったように水の電気分解に使いきれるならば本当に何にも環境を汚さない格好に原理的にできます。だけど、それがいわゆる社会のシステムとして出来上がるとは僕は言い切れない。そうなったらいいなと思いますけど、そこのところはもう少し議論をしていく必要があるのかなと思ってますけども。他にございませんか？次に進みたいと思います。(5) 令和5年度 of 取組みについてでございます。

運営(上野)：ありがとうございます。対馬 CAPP の上野です。令和5年度 of 取組みについてご説明させていただきます。対馬市海岸漂着物対策推進行動計画の評価表に伴なって発生抑制の普及啓発など令和4年度のことをご説明させていただきましたが、この会は、令和4年の、今までやってきて新しい問題とかアイデアとか次から次に発生してきまして、対策推進行動計画に基づきまして今後も継続していくんですが、その中で、5年度 of 取組みとして今議論にも上がったように1つの話題に対しては皆さん集中するんで、ただ漠然と行動計画だけをやっていくという形だけですと中々難しいんじゃないかと私達も考えまして、4つの項目で来年、できれば継続させてもらいながら進めていきたいと思いますが、問題としては島内の事業者が回収する海ごみは、いっても中々横ばいといたしますか、取っても取っても現実的にはまだ悲惨な状態にあります。また今後対馬の業者も高齢化して人口減少もありますので、さらなる困難になるのではないかと思います。2番目の圧倒的な海ごみが押し寄せる対馬において回収ボランティアを体験し、海ごみ授業、島内視察等行なう企業、学校等の研修旅行は年々増加する傾向にあると。さらなる普及啓発と対馬型の観光授業活動の拡充を図ると。漁業従事者、人口が減るとということが判明しまして海岸視察とかボランティア活動の方々は増えて参ります。その回収量も年々増えていきます。この人達に発生抑制、先ほども言われたように環境授業もものすごく充実して環境スタディツアーも深めていきながら今、対馬グリーンブルーツーリズムの川口さんとか犬束さんとか実際にそういう旅行のコンテンツにして漂着ごみを課題にしてプログラムを組み立てていただいているようなスタディツアーも含めましてそういうのももっと充実した形で私共も進めていければと思っています。3番目に回収するだけでなく海ごみに付加価値をつけ、リサイクル資源として商品を生み出す仕組みを構築すると書いてますが、ごみを例えばコンビニのかごにリサイ

クルしたりボールペンとか、そういう企業もいくつか見つかりまして、実際にリサイクルの資源として活用していったる現実があります。あと、発泡スチロールのペレット化も減容化も進めています。ということで、最後の4番目はまとめみたいになるんですが、海ごみは対馬にとってネガティブな要素であるが、取組み次第によっては好転すると。要するに循環経済を活性化させ段階的に漂着する海ごみの回収と発生抑制を目指し、対馬の美しい海を取り戻していくということですが、対馬モデルといいますか、位置的な対馬の場所を利用して逆にごみをネガティブに捉えず次の産業といいますか、捉えられたらいいなと思っております。この4つを、今までやってきた全体的な問題をもう一度振り返りながら1つ1つを私達も提案させていただきながら進めていきたいと考えております。例えばその2番目なんか次のページの、先ほど吉野から説明がありましたが先月博物館で海ごみのギャラリーを作ったところ、みなさん結構おいでになっていただいて実際にマイクロプラスチックとか破碎したプラスチックとか見ていただいてリサイクルまでの1つのギャラリーで展示したところ、地元の人達も分かりやすくて、こういう形の、今トランク・ミュージアム®対馬版という形を、5つのトランクを博物館として実際に教室とかそういう場所に私どもが持っていつてますが、実際に以前糸山委員長がおっしゃったように、海ごみセンターなるものを、ネット上じゃなくこういう場所があると説明しやすいし、説得力もあると。実際に島民の人達もなるほどこうやってるんだという気づきも多くて、こういう場所があると、今後コロナ禍が終わると韓国の人達も実際何十万人と来られますので、実際に韓国の企業とか団体とか旅行で来られた際に、こういう場所で今やっている環境ミュージアムみたいな形を見てもらう方がより多くの方々の発生抑制につながるのではないかという、例えばそういった具現化といいますか、1つ1つを実際に見える化をしながらこういった大事な協議会なので、進めていけたらいいかなと思っております。さらに冒頭にも言ったようにまだまだ漂着ごみは海岸にとてつもなく流れて来るので、この問題と解決策は今有識者の方々にお集まりいただいてるこういう協議会で問題を解決しながら、要するに蛇口を締めながら発生抑制、回収をしていくという形、実際に見える化する形で今後進めていかなければ、今後この評価が△から△じゃないですけど、一つ一つをやっていききたいと考えてます。

糸山委員長：よろしいですか？どうもありがとうございます。令和5年度取組みということですが、取組みの現状と課題、島内の漁業従事者が回収する海ごみの回収量はほぼ横ばいの状態で、今後対馬の漁業従事者の高齢化、人口減少により海ごみの回収が困難になることが予想されると。2番目。圧倒的な海ごみが押し寄せる対馬の現場において、回収ボランティア作業を体験し、海ごみ授業、島内視察等を行なう企業、学校等の研修旅行は年々増加傾向にあることから、さらなる普及啓発と対馬型環境授業活動の拡充を図る。3番目。回収だけではなく、海ごみに付加価値をつけ、リサイクル資源として商品を生み出す仕組みを構築する。さっき私が少し話をしたことと合わさることです。4番目、海ごみは対馬にとってネガティブな要素であるが、取組み次第で対馬が好転するきっかけを持っている。循環

経済を活性化させ、段階的に漂着する海ごみの回収と発生抑制を目指し、対馬の美しい海を取り戻していく。これが令和 5 年度の実践計画をまとめたものです。何かご質問等ございませんか？

中山委員：3 番に付け加えて、もし今後の検討をしていただきたいのは、企業が対馬のこの活動を応援した時に、その企業が応援しましたということを周知できるような仕組み、例えばさっきの高校生の教育に資金的な援助をしましたとかいうことであればそういうことを対馬海ごみ情報センターに掲載すれば、韓国から来た人がその企業の名前を見ることができて、韓国にもアピールできますよとか、対馬を応援することで何かメリットを感じられるな仕組みもちょっと検討していただければと思います。

運営(上野)：ありがとうございます。私達もそのようなことについては会議したりするんですが、先ほど先生がおっしゃったように、企業がスポンサーになってもらって、例えばペットボトルを出してる飲料水とか、逆に先生の肌感覚でいいんですけど、スポンサーになりうる形は可能ですか？呼びかけていこうとは思っているんですが。

中山委員：可能だと思います。

運営(上野)：そうですか。ありがとうございます。

糸山委員長：スポンサーになってもらわなくてもいいのはいいんじゃないですか？実際からいうと。こういう海岸清掃にきました。その一言でかなりのインパクトを与えてくれるわけだから、逆にいうと、対馬 CAPP としてはどこそこの企業がこうやって何月何日に来て、これだけのことをやりましたよということを多くの人に分かるように説明してやると。それが結果的には色んなものに結びついていくんじゃないかと私は思いますけど。

運営(上野)：ありがとうございます。私達もそれは感謝していますし、今後その取組みはやっていかないとはいけません。前小島さんがおっしゃっていただいたように、中々遠いと。遠いからお金がかかるんでという。そのお金を用意してまでボランティアに来て下さる企業は本当に心から前面に出してもいいくらいの、僕らも始まったばかりなんで、そのことをみなさんにご意見をいただきながら進めていかなければならないと反省してるんですが、おっしゃったようにスポンサーというより、来ていただいただけで、皆さん予算ご準備してから遠いところまで来てもらう、活動をしてもらうということは本当に私達も感謝しているし企業としても良い取組みになってくると思いますので、これは私達も今後やっていきたいと思っています。

糸山委員長：どうもありがとうございます。他にありませんか？基本的には上野さん、今年令和5年度に関しては、こういうことを中心にしながら取組んでいくということになりませんか？

運営(上野)：はい。全体的な話し合いももちろん必要だと思うんですが1つ1つにフォーカスしながら、実際にこの前のポリタンクでもそうですし、リサイクルについても先日エルコム社長が来られて、減容化できたけど、まだ熱エネルギーといいますか、実際見える化まではいってなくて、よく企業の方に説明するのは、ペレットにしていますというところまでなんですけど、その後の取組みまでとかまだまだ私共もまだな段階で何とも言えない状態なんです。

糸山委員長：どうもありがとうございます。他にございますか？こういう形でやっていくということでもどこまで上手くいくかはちょっと分からないというところもありますけれども。ちょっと私がお聞きしますが、海岸清掃においでになっている企業等については、その方々と高校生と同じような形で話合うというようなことはできるんですか？

運営(上野)：はい。実はそういう話は、企業とか、IVUSAという大学のボランティアが来るんですが、ぜひ地元の方々と取組みたいということがあって中々普通の日だったり上手いこと学生同士のタイミングが合わなかったり、高校のユネスコスクール部の方にはお伺いを立てたりしてるんですが、今後そんな取組みもできたらなと考えているところです。

糸山委員長：私も月1回や2回来て掃除したいものですが。他にございますか？

大庭委員：2番の海ごみ情報センターの具現化というのがありますけれども、今もしすぐできないのであればクリーンセンターとかよく色んなもの置いて見てもらうと。対馬がどんな形かよく分からないんですけども、見学者用のコースを作ってそこに置いて反応を見るとか、海ごみだけでなく関連するものを他にも置いて、私以前他のところに行った時には生き物の色んな水槽とか置いて非常に見栄えの良いというか、ここならお客さん来るんだろうなというような見せ方してたんですよ。そういうものと併せて置くとアピールできるし子どもも行きやすいし、とりあえずやってみるにはそういうこともありかなと思っています。

運営(上野)：ありがとうございます。

事務局(阿比留)：対馬市の方からおっしゃるように、見学のブース、クリーンセンターの方はそういった見学コースがあるからいいんですけども、海ごみに関してはその辺りの今

ある中部中継所というところが海ごみの処理施設になってるんですけども、そちらの方に見学ブースの設置とかいったことはやりたいなと考えております。先ほどから色々と、分別してリサイクルがちゃんとなっているのか、そういうこととか、ボランティア企業のどこどこが来たという発信をした方が良いのではないかというですね、非常になるほどなど。おっしゃる通りやりがいといたしますか、やった甲斐といたしますか、そういったところの提供がちょっと足りないんだなというのを皆さんの意見を聞いて非常に感じました。なので、現在、発生抑制の映像を作っていただけてますけども、実際に分別してリサイクルしている様子、今現在のですね。そういったところを映像にして市民の方々に発信すべきだなと。今現在、ペットボトルなんかめっちゃくちゃ高くなってますよ。ペットからペットになる。マテリアルからマテリアルにする。スチールからアルミから非常に高値でゴミが売買されてますので。その状況もやはり皆さんには知っていただかなくちゃいけないな、それが市の財源になってますので。それがいかにインセンティブとしてお返しできるかというようなことも考えていかないといけないなと考えているところです。環境政策課の方がまだまだ発信力が弱いなというところを非常に感じておりますので、その辺りを今回の皆さまのご意見をお聞しまして、CAPPAの方とも連携をしながら、もっともっと情報発信をどんどんやっていきたいなと感じているところでございます。ありがとうございました。

糸山委員長：本当にありがとうございます。他にございませんか？

運営(上野)：よろしいですか？ありがとうございます。さっきのこの海ごみ情報センターの具現化ということなんですが、企業の化学総連様とか皆さまが来られた時に、一応エコツアーの艇庫で手作りの形で環境授業とか写真とか見せてご説明させていただくんですけど、結構勉強していただいて、そういうところがあると1つの観光材料といたしますか、ミュージアムといたしますか、観光ミュージアムみたいなものがあると、さらに観光率が上がるんじゃないかということと、今の発泡スチロールに関して、島民が、ペレットの材料だけ見せた時にびっくりしてたんですよ。これが熱エネルギーになるんだということで、えっということ、ゴミが燃料になるのみたいな感じだから、発泡スチロールだけはとっついてよ島内ですってだけで、それだけで1つの注目になってまずこれを分別しよう。プラスチックが実はエネルギーになるんだよねって。1つ1つ、川口さんや犬束さんが問題を提起されただけでもこれだけの長い時間があるので全体を進めていながらフォーカスして問題を解決していけたら1つ1つ具現化しながらということをやりたいなと令和5年度は思ってます。僕ら社内の移動とかもありまして、全体的な進める形をとってましたが、今後は色んな問題とかアイデアも見えて参りましたので、今後もよろしく願いいたします。

糸山委員長：ありがとうございます。他にございませんか。それでは、4番の全体を通じて

の質疑応答ということで、何かございませんでしょうか？全体を通じて、ここは聞いておきたいというようなことがございましたら。ないですかね？その他連絡事項等です。事務局お願いします。

運営(末永)：皆さまお疲れさまでした。令和4年度の協議会も、この3回で終了という形になります。また来年度も、先ほど目標に掲げました通り、弊社でも頑張っていきたいと思いますので、今後ともよろしくをお願いします。

糸山委員長：それではこれで終わりたいと思います。ありがとうございました。